
愚者の空虚

エンカコバルトシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愚者の空虚

【Nコード】

N8149P

【作者名】

エンカコバルトシ

【あらすじ】

現実疲れ果てた少年は、ある世界に迷い込む。その世界で死人を喰らう少女は自らの事を天使と名乗った――。

プロローグ 灰色の午後

「今日も天気は曇りだねえ」

古びたアパートの一室。どこにでもあるありふれた光景の中、白い瞳を持つ少女は空を見て呟く。

「まあ、どうせあたしには関係のない事だけだね」

そう言うと、少女は台所を見て妖しく嗤う。――少女の視線の先にあったのは、既に息絶えた死体の群れ。

「そう言えば、まだ食事が済んでなかったや。それじゃあ、死肉でも啄みますか」

甘い血の香りが部屋を包み、少女は舌舐めずりする。少女が台所に向かった後、灰色の羽が一枚舞い落ちた。

「そう言えば、誘うの忘れてたね。どうしようかなあ？」

食事が済んだ後、少女は部屋に寝転んで夢想する。

「……まだ人の姿に留まっているのかなあ。いい加減飽き飽きしてもいいのにね」

何時の間にか背に現れた灰色の翼を軽く羽ばたかせ、少女は微笑んだ。

少女は人間を愚弄する。まるで嫉妬するかのように。

――愚者に与えられるのは空虚のみ。

誰となく呟いた言葉が、灰色の世界を包み込んだ。

プロローグ 灰色の午後（後書き）

初めまして。エンカコバルトシです。今回はさらりと書いてみました。次はかなり長くなる予定です。それでは、暫しお付き合いの程を。

第一話

「……………もう朝か」

騒がしい携帯のアラームを消し、少年——瀬名智樹は苛立ち気味に布団に包まる。

「どうせ、昨日も弟と俺を夜中まで比べてたんだろ？ あ親。別にいいけどさ」

苛立ち交じりに枕の近くに置いておいた音楽プレイヤーを起動し、ありふれたゲームミュージックを流す。勿論、音量には気を使っているが。

「不味いな。朝のトイレ時間か」

尿意を催し、智樹は溜息を吐いてシングルベットから潜り出る。そして立ち上がると、おもむろに部屋のドアを開く。

「やあ、兄さん。今日はどうしたんだい？ 何時もより起きるの遅いけれど」

ドアを開いた先には、弟が汗だくになりながら廊下を歩いていた。

「朝のランニングか？ サッカー部はご苦労な事で」

皮肉を吐き捨て、智樹はトイレに行こうとする。弟は憐みの視線を向け、一息つくど、

「兄さん、何でそんなに突っかかるんだ？ 僕は——」

「これ以上言うな。潰すぞ」

殺意すら視線に混じらせ、智樹はトイレのドアを思いっきり閉じた。

「あら、和彦。今日はどこまで行ってきたの？」

「近くの自然公園までだよ。朝食の支度、手伝おうか？」

トイレを終えて、智樹が自分の部屋がある二階から一階に下りると、母親と和彦が話していた。智樹は呆れながらも無言で洗面所で顔を洗い、着替えるために上に戻る。

（良いよな。親に目を掛けられる奴は。俺は殆ど見捨てられてんの

も当然だけどな)

心内で唾を吐きながら、智樹は手早く制服へと着替える。そして、鞆を手にし音楽プレーヤーを消すと、一階のダイニングへ向かう。

(今日は俺の当番じゃないけれど、またネチっこく言われんのかな?)

嘆息しながらテーブルに着くと、案の定母親は苦虫を潰した顔で待っていた。

「……………智樹。何であんたは和彦みたいに手伝ってくれないのよ。それに、自分の部屋に籠もって……………。どうしてお友達と遊ばないの?」

「余計なお世話です。それに、一応洗濯や風呂掃除はしています。母さんに文句を言われる筋合は無いと思います」

苦々しそうに小言を言う母親を躲しながら、智樹は朝食であるご飯と味噌汁を掻っ込む。和彦は仕方無しとばかりに、

「兄さん。たまには母さんの言う事も聞いたら? 確かに兄さんは家の中に籠もり過ぎているよ。高校生なんだから、部活したら?」と口を入れる。

(高校生らしい? 馬鹿じゃないかこいつは?)

思いつきり舌打ちしたい気持ちを堪えながら、智樹は無言でテレビのスイッチを入れ、チャンネルを回す。

「智樹、何で無視するのよ。和彦は折角あなたの為を思っているのに」

窘めるように母親は言う。智樹は鼻で笑いながら、天気予報を確認して電源を落とす。

「部活なんてする必要ありません。大体、どうしてそんなことしなきゃならないんですか? 高校生らしい生活と言っても、俺には到底理解できませんし」

皮肉を込めながら、智樹は空になった茶碗を流し台に置く。

「でも、兄さんは本当は、」

「黙れ。喋るな下種が」

口を入れそうになった和彦を睨みつけると、智樹は洗面所へと向かった。

（朝からうざったいな。何が兄さん兄さんだ。本当はそんな事毛ほども思っただけに）

携帯で時間を確認しながら、智樹は思わず舌打ちする。

「まあ、いいさ。こっちは好きなようにやるから」

それだけ言うと、智樹は早足で近くの駅まで向かう。

「よお、ネクラちゃん。お友達がいなくて悲しいなあ」

駅に着くと、中学時代の柄の悪いクラスメイトがしきりに囃したてていた。智樹は無言で通り過ぎ、2番線へと向かう。

「おいおい、何も言い返さねえのかよ。これだからネクラは困るよなあ」

「言ってるやんなよ。アイツなんて、ヲタクで只のニートなんだからさあ。負け組だな、ホント」

向かい側のホームなので、クラスメイト達の罵声が否応なしに届く。智樹は歯を噛み締めながら、乗る電車の到着を待つ。

（・・・・・・あと2年半の辛抱だ。そうすれば、こんなクズな連中の顔なんて見なくて済む）

師走の冷め切った空気に耐えながらも、智樹は空をぼんやりと見つめていた。

（肉親はうざったいし、知り合いは知り合いで吐き気がする。逃げ出したいね）

通勤時間で人が詰め込まれた電車に揺られながら、智樹は嘆息する。

「折角だし、学校サボろうかな？」

もう幾度も考えたであろうそれを口に出して、智樹は降りる支度をする。

（これ一回だけだ。そうさ、これ一回で明日からは行けばいい。一回誰にも邪魔されずに一人考えるのもいい事じゃないか？）
そう思い込み、なんとか降り口に足を運ぼうとする。だが。

『ダメだって、現実を受け入れなきゃ。人生諦めも肝心さ。何てったって、そんな勇気ないだろう？ 意気地なし』
自分の諦め混じり心境が甘く囁いてくる。

（けれど、現実は何とか変えられる。それに、俺なんていなくても学校は回るだろう？）

そう考えて、足を一歩前へ。

『いいや、違うね。別にお前が居なくても確かに世界は回るさ。だが、そんな事をしてても現実は何も変わりはない。受け入れるしかないんだよ。経験からでもそう思うだろう？』

そう諭され、一歩後ずさる。

（けれど、それでも変わっていかなくちゃ）

『甘えるなよ。変化なんて所詮幻想さ。立ち止まるよりも、諦めながらも前へ進むのが賢明な生き方だと思うがな。それに、もう遅いさ——』

「ッッ！」

気がつくと、乗り換えの駅に着く所だった。智樹は忌々しげに拳を握り締めると、電車から出た。

「……変わりたくないんだな。俺は」

自分の不甲斐なさに呆れ果てながら、智樹は乗り換えのホームへ向かった。

第一話（後書き）

次回は回想多めです。まだまだ日常が続きます。もう少しでファンタジーに到着できる・・・・・・はず

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8149p/>

愚者の空虚

2010年12月31日10時34分発行